





門號 5194  
卷 1



此書是寛政甲寅年丙辰秋月  
予がりをうながせめ復す肺氣患ひ久  
し多黙居ゆけかのきとももてもいつまほ  
てよきよそは十あまりこのきとももれ  
退深離れとおつけ書櫃の底ねり入せ  
ゆくよむる。雖書れ況もよもて。“如  
す人品の評論やまくわぬ及ぶ。詩詩よ。摺  
意。論說よ。さやか。書ぬよ。されど。忽ち  
送ふ。しゆうじゆ。門額もりも抄  
いのうのうれい。あくこくこくこく

昭和三十一年一月十八日 購求

すまえがくらまつまよりあたへと  
えぬまのくらはゆるもとまつむさうる  
とゆくこかくア辞くめよと風ふれ  
御惠いとくまぬ事だれがのつたりまくのく  
とくりよじい無く今よどきもあひあ  
せまされてよのをくしよ、われは少くも  
じよも新しに益があるくもあわせてもやれい  
きよのくわくわく小抄書み體がくす  
歴の次序をなぐさゆのくもくたもく  
やくわ葉うんはつの設あがく持書軒

お買おう大がむを識り不采者より小を識る  
もあまくとほりよのきのよしのうへある  
けを知りてはりしと候處をす  
まこと實取九のくせまきあはるはたす將  
宣信といつけぬ

退閑雜記卷之一

わいとお板をうめまかねほまくかまのとま  
を火中へ通すとまひとまを取れり切てふ、  
おもておもておもておもておもておもておもて  
おもておもて

お前の人御東坡にておもておもておもておも  
やうのよき、ゆうじんがくを食すとれりおも  
もおちおちおちおちおちおちおちおちおち  
おちおちおちおちおちおちおちおちおちおち

高麗の事は人情の事  
日本は人情の事  
北國の事は魚を  
命をうなぎを  
米をとて水を  
黒魚とて魚を入る  
アリモニ魚をふくらむ  
鮭が皮をとて腹をまくはあ  
アリモニ魚をすく  
さくばすてるる人のあ  
アリモニ

草木の流れをたゞく　後を心より　鍾乳を求

根の草木は大まかに以下  
草木は多くも長いものより、春のもの  
には、冬の硝を根柢にて

九月より豊後の山上にあらわの山アヤシム  
集め奉る。塔頭と申すが本尊は彌勒を祀る。剛三郎  
か云々。之老僧の類もあり。此處は  
大破。井上すれどよし。或少體の様のトキ  
た形のまゝを多く見る。そのうちが少く  
多く。塔か柱かあり。もやもやする。また  
塔下の柱もあつて、その上に塔がある。塔  
の上に塔がある。塔の上に塔がある。

以水炒球也

近頃はおもに京師で金銀を貯め、其の後  
銀錠を常のとおりに運び、また其と並んで  
の大を元の本店へ送り、

率牛子はよく腸胃の疾患をうなぐ。東の方は寧平  
までもひまわらしきもとあり、さほどのいふるよ  
うきくいふく半日た夏、日ひあつてもひがひが  
す、おひのあくすく、ゆかりきて死んでしまふ  
懷に入りあくみえまつまほまほのまほ

三十日  
身を保てゝの功多々たまふ  
身の年も辛くもあら  
あはいと申する様ゆき  
身の日はより多く餘を取る  
胸にさへおれども病ひぬ  
よしわらひを送る事あれば  
胸をせうへゆくもすがれぬ  
深下するに才く浮上のみ  
精神一時ニテ森  
身を保てゝの功多々たまふ

雀亂のむ海もまくす風にむきりと  
たる波を馬頭すゆゆれ、忽ち妙みしと雀  
來ひつりよもあわめりてゆれ、蛇がむ  
えもん乃等もりえいわうてちりかく  
いはゆちぬ海の波、人今いふ  
伊勢の國初和む山根の御子吉善

水銀れどすのあはまも輕船をひよしむ者  
まゆゆねやまくはま船来のをかくすくす  
鰐のあまあくま、貪毒あまへ小赤胡湯よす  
をくちくま釘たれをまくのめ、忽ち効す椎本  
すくまくまくわくまくのめ  
鳴かやむきのくまくれ多くせ一ゆる文のふくわ  
きくくくすすくくくくくくくく  
父おとこりくくくくくくくくくく  
あまくまくにゆ父おサボテンをくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

ゆすりておまかせす。先に居ておまかせす。おまかせす。  
をもとくおまかせす。つる高ておまかせす。おまかせす。  
おまかせす。めでみよ。旅の津深ます。おまかせす。  
おまかせす。

うかうかはまめと。紳士代へぬを掌ふ。父の跡  
名奉ひ。おまかせす。おまかせす。健す。常す。よわ  
う術す。に拙く。流慕の旅す。おまかせす。おまかせす  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。

おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。

金の草とよりあり。あれを表す。金の草と。鑄  
箔をうけた。おまかせす。紅葉をあざり。おまかせす。おま  
かせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。  
おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。

油絵のあす。おまかせす。おまかせす。おまかせす。

ゆくにゆきすむわづかにゆかへぢりる

かづきあ

秋月れ秋松平乗寛船臣わらひせりゆのま  
美をもとむじとむむ

以下お流れりまうつてくぬ花はくはくを  
しよくはくとくとくとくとくとくとくとくとく  
やふととくとくとくとくとくとくとくとくとく  
むとととあくわがの靈前と傳ととととと  
意賣船出とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
えふととと波うあくめのり袖めれととくとくとく

橋拉校保と一いと名とまき盲人すりと和室をと  
くと車とと式ととがととととととととととと  
轍とと多と板りとととととととととととととと  
とあつとお宣政五家のはねととととととととと  
とととととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと

青麻はとととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと

山居院羅縵が住去法照荘恩が筆へ筆  
力於絶して教ふてうへてすすむに住去家の古井  
荘恩の事は羅縵がをもよしとすすむにあ  
わや抑荘恩元暦達久のは持津山住吉は経  
ふ之れふの詞書皆水一後京極殿いと代  
りあいよへられ志がれよ水生の隣はふに  
あら草木の事をあそぶよすすめのうみ  
寛政五年八月三日左少將源定信が筆す  
予近藤はちねあて資愛<sub>太田備中守</sub>がすめを贊  
書する事あるを賛すとてをすりぬ

主に以田翁は序飯へ成るしけれとも、後取の人  
く彦川法照は重小波あざくがつりがのくち  
かで、一事あり太田資愛<sub>太田備中守</sub>の席上に、  
主の事をうよほよ多く思ひゆゑく画を  
主の仕をかずくを席上に詠歌を多く  
其の後主は因列乃人へてかく約もひ  
以主後主の人へ小列へて筆をもよされ  
以主後主の人に主を下與てまきてひもも小  
物をとくをぬきとくをぬくへ思れ

一端又性の如きを納むる日暮と稱する  
其事華は日暮に因りけ故也。此に「日暮」  
をすて「晩」をすて「夜」は於て可なり。然る  
も小川のああい只詠歌をもつて爲ふ  
ハ職掌を論じてすむあらはれ、出處信成等  
を約そし、其後何處も見ゆるゝが、詩歌の  
く列べ入るに至る資本既ト乃ち意力が無  
將を以て之に華を深められよのちお世  
俗の少うの列あやうしたよ人よ。  
不外そのうねりを以てけぬた絶句

日暮の事は思ひあして思ひ難くすか  
歌もあら

當事の歌いあそびに至るがつあ  
至歌をりて玄歌を免るゝ是の後  
而龍遇歌あつて、之を「歌の後」  
と名づく者ありて、其の後  
を以て之を「歌の後」

少優待はあきふさかの歌也。至代代  
ありてかとめどくのとよしきが、筆  
歌の如きが、極度深だる言ふ事有

十吉あ坐閑少将涼を伝矣。」<sup>シヌ</sup>

波襟鏡、水根を月うらみとす。柳日ぬれば  
つまよしのまきを馬の合ひふくらむよぢか  
はまくらむ。」<sup>御唐西風へ漂流</sup>

高輪小法藏寺よりあらわの付物。楠正成のもの  
といひゆきてたら今をくまゆる法藏も丁度  
をり。人なり。寫経のあり。御ゆめのあらわ  
多。唐くぢつて。そぞういと。寺も。住僧も。廟も。  
什物のものと。御ゆめの。すり。御ゆめの。の。おつま  
も。ア。邸へ。おこし。ぬ。長邊五郎の名跡十六段漢丸

畫ちよへ。いと。うき。なり。楠正成の胄もあり。はまく  
ひのうなまく。附は板を少へね。うの。是  
事ゆゑ。あらん。幕。おほ。詮。あ。幕。おほ。相軒  
を。まよ。と。あら。幕。おほ。詮。あ。幕。おほ。相軒  
み。故。下。摩利。天。う。の。像。を。う。あ。う。よ。一。う。古  
て。深。じよ。あ。う。い。の。事。お。あ。う。よ。一。う。古  
と。う。う。う。櫻。武。帝。の。ゆ。觀。音。あ。鈴。武。帝。は。ゆ。櫻  
信。高。い。き。を。能。む。首。づ。き。あ。と。よ。う。の。像。と。ま。う  
さ。り。和。義。盛。う。な。る。御。縁。波。10。是。光。信。え。い。ゆ。波

修復行すありて、此一事も、まことに所重仰  
せしと存じる。

蠻國より外國まで熱病ありて、其をもくろひ  
汁を飲む。裏の山へは、山の水を汲み、その  
中をのどに含む。はなべて、うそりと、かくらむ。  
病者多く、死んでしまがまれ。清涼多しく、勿ち  
空腹を経て、歯がさめぬ。耳のあらゆ  
汁を飲むよ。まゆも、足りる。

あざれより、大輪福をもぐ。瑞琳が産き、おもての子  
は、芋を食ふ。お腹も、おなかも、常は。

まやく、ゆゑで、かのうすも、かくまれば、まくら  
へん。かくまつて、かくまつて、とて、すまて、輪福を  
人をかく。川の裏、まくら、城をかく。まくら、笑ひ  
まくら、だれぬ。

京都法隆寺、光明皇后の佛經写本あり。之  
れ、以て、正教を宣れ。日本四国四智法書寫本  
を書一巻。每々、乃社を、西野宇治、皇后の經を  
ある一日、何處か、正經を書寫する。總て、  
皇后の書と、まつて、正教を、傳へたる。

はまの車考也、多承居り候よおもむくにさ  
ひまよき者を考へて、うけあはれかとおもひゆりて  
ひぬにせりとくわく、一言の事無く考へてよしは  
年事考へみた一つとて、めかははて、ほふく  
か月とあるうねるまで、人へくわくすいはまみ  
ひうち森半程まことにまづくらうとく、まづを  
ちまくらうてまつて、まづくらうとく、まづを

はるかに東洋に、左の將が朝鮮を主導する事と  
連絡、その間を取扱う上層部には、必ずしも日本  
の軍事的影響が及んでいた。左の將の主導する事と  
連絡、その間を取扱う上層部には、必ずしも日本  
の軍事的影響が及んでいた。

がり志の野をはまむれをまつて門十谷は東往衆役  
の内に詔能書をさへ新よ重慶をきこひすよ  
黒毛馬を教へ多くわざるをなすとがまつてよ  
とまき無事にまきゆく行三毛をも全備せん  
とまきゆく家衛八國日追の手小姓をひふを  
とまきゆく下り我のそめくら跡せんとまきゆく上  
中下り外引ひく身送れぬ元源寛永の御  
蓮波室を多め觀玉色く筆をもてまよ考詔  
詔筆お仲重能ト 土御門文忠 おたえり將係院  
下志道と往行思以世尊寺行成事多見ぬ御了院

此はまことに能書の家よく書こなすと知度を鑒書  
家がくわゆる事より宣政もまた力のひあつてのりと  
すらうるる親王の書鑒をとほどすとよみく  
れ、後と家軍詩序文もあらぬ。古文  
可かくは年々とぞめきのなり。右と共てより  
筆と筆をもよよと通親王から承りあつて  
書くよしとぞかしこ。そのふれあはるる親王御筆  
御筆と御筆の通以三位からぬる和高す。  
是を親王御筆行筆の行思殿臣とよしとて  
書玉常とちゆる御筆御筆の歳四半行手

三五十行思節下六十行道親王應ふ十年と盡去内  
歲をもぬかれるもひ老矣よしむ名とく御筆と御親  
王とくとて御筆御筆と生つてゐあつくり思節の三位  
行思节下へ自詠六章は事なりとて御筆の御筆  
御筆ととて御筆ととて御筆ととて御筆の御筆の御筆  
御筆ととて御筆ととて御筆ととて御筆の御筆の御筆  
御筆ととて御筆ととて御筆ととて御筆の御筆の御筆

寛政五年 丑十一月辰刻 詩之源子祥

京東山禮林寺まよ湯泉まよ太閤秀吉とふれ合  
なく多く總てあり朝鮮征伐のものも書寫するもと  
之角合を亦ノ總てある

筑前國美濃は或種まけ地小笠山に於く夜半ひ  
生詠草書によく今よりうなづく  
エレキテールセーリセイトやくらば探車を拂つて  
火氣を發せられ益都を窺つてアリテ無事と云  
器を多仕立てて寄る爲めに更にアリテ無事と云  
ふてあらわなるいす肺附のうちにをほほや  
毛皮の下に着用せしむれおろれ取走り大

氣象とよきをなづくよきをりあり滑らきよきをく  
度たれりがれりがれりがれりがれりがれりがれり  
史可かうき支那の人とぞかな東北をめぐらす  
はあくとれ多れりへ水牛とよしれち家をけり  
の火事と窓まれ、多て扇ひかくり 温暖の氣を  
衆陽はあすとぞ知れ大抵もせんとぞ重ねる  
臺灣はえどもその風土乃ちまじめと今より  
もあらそち中へとせんとぞをうけめまくと  
リヨクトホンフをまよ多治まのを飛流する急を

され、宇二三弓を移してあり、お出でなまくは生徒  
玉毒や、そもみだて、城主ての毒やのまをきく  
引ひ、忽ち死ぬの事なく、され、忽ち活られ又  
あやむて、すと、口鼻をみやつすと、死んでゐる  
道程を、牛車ねますので、油を、のめ、米城つゝち  
は精巧よあれ、山を、さざれ、日よせいと、  
そそく、ぬすけよ、ひづり、考えよどり、う  
きよた、ふく、魯西亞へ漂流せし、今乃川狂  
のゆゑ、ひづり、いづきと、紅びの車を、持  
て、まつだ、日本に、日下鶴輪の人、住處を

蒙古文書卷之二

相模國乃より川を富士山とす。よし  
むかへる。一月のふもとには、山がま

はてみよ、物の事ことをちぢめよ  
せふよ、ねれどよしりが有あつておま  
す、喬たかき本もとへかりよ  
せよ、紗ざうるわしくは、  
多おほく内うちよみをばらす  
まを思おもひは、はるかの、  
まを思おもひは、はるかの、

考否せしらむだ。考をもとより克ちめへな  
らぬ事は、又えまほ、近きにきの命ふやまんすれ  
とく。國家がひ家階あらわゆるを、命ふすを、近きに  
やまにけり。いづれ不生の事あるべからず。觀のたゞ  
ひ考のう。死ぬたゞ、命す。心てやまんす。そ  
ぞれ生がゆく。山あらひて、いづれをも  
情よし。只進行藏と教をうけ。是れ、命を知  
ふた憂やうめ。情多玉堂、義能能れ可とも。寔  
倉ひすわまき。されば、是れ、小宗利をす。退

進正以義執道而歸之  
立之以家而歸之

蒙  
古  
小  
里

あれやんとましゆうへて、門方へ表されぬ  
事多し。此の家をばまつまつと、かくかく  
歩き、身の内をひそめ、いふこと  
れぞ、娘難をよぶ。愚痴せよとあきらめ  
事、多く、事多し。少く、人あり  
川も、このへんに、あらましま別の一處の外に、ま  
る事す。といひてゐる。

以のまゝの流を  
察ひて、  
陽を伏の様に  
見し

孝子傳水猿傳子山傳水猿傳之傳也

手三十本ふたをもつて夏大住や夢の島興  
あまくにまゝ馬を水めきれ伝ふる處  
すすりはめ多わふ有いよくまつ教禮をうな  
えれ教礼すれんじあひす徳あれやむらへ撰  
手すれの言ふもすくいふくやまつれのまくせ  
かきまづきすきこむすりきことをゆくれいさ  
みすきまづきこのくじくまがちぢけ

是を以てよきあへて予の職、公托職す  
シ故に之を以て我が所ふ常れ里をとる事無だつて  
子骨は生れ小駒傍の生れ、武道と亭子思  
ひてく人すかう坐相馬寺常長老うされ  
てまく文書をばうり教子をりてすおれ  
てまきぬ

天小安んちもいよをこれよとけめにうれ  
つともかくすもを天よやひ、一ぬれとくにこ  
うやうの医者とまく病院の内抱まつやく  
ひきくき病院倉を天守とてひを月う素え

され天アモセテ命小安んすみとよはふく  
まもすきやうじぬるゆる人トあまれんされあまく  
今よりハ一部多の樂しもかくもくの所れ  
只言まの在ぬくにれ、水くはくめておてて  
にさをすめ力をはくすむ一惟又経糸利  
のあく小国ひに非道ふく一力力を重くすむ  
事のれども事をもすりふくよとまく多歎ひ歌へば  
いま車くよよ、浮世繪りとく、漫論これと居  
れ六學吉の國をうそとおれ彼をもとめきの

かの春日在山へ縁起家中  
人へお詫多室武益の餘は酒度と割りやうし  
て  
あつまひ、奥へ詠舞のよき未下すうち芳桂  
がくさをあづむき其れ山水よりいはく風わき  
ふへ流をよむねるき、守ね城うして、彷彿す  
うけをゑづのうことまゝ今れ世のうきゑづみ鴻  
四川の蓬船をうなぎすきのうめうきのうと車  
くふ浮せや鈴のいやくま流のうきえうきのう河  
なもくすみかた體をのぞむと歌ふにけり  
いすれすがくほのせゆをきて、おつまゆ

とくに古事記よ先代事よりあへて清々免をもつて社  
事よ御子をもつてなし事か心元が多日をむ  
とろひとて一時の玩弄とてあす事つゝわい身  
うすうとく利きれども唯一直れ玉をもつて  
身をまれし水のうきがく言ふては  
ほくと見らるゝせ経のうりいまは體がほ  
せまのうり。其の山水をものわぬ説くは  
車くとくに車を統じておまえは車け、は車  
字をもつてよたりの車よりて手製皮をもつて車  
あれども又唐車よりて手製皮をもつて車

をうやまき事へとあらへ山水人の如のとよむ  
に山家風はるゝをすく爲士の山がすすむせん構  
成するやうでまつたき車を院寺のまく次  
第もよしよつて御

癸丑十一月了め本並檢校より旨人のより旨令  
六千人車く駆けりするれひかきぬ城根に  
いき、おのの旨へとよもよもとくが家をうち潰  
き御とも意の移すなく引へやうた駆擾々  
及ひゆきし御とくゆき御むし山坊主  
まきしゆきあれく旨人のより謹覆

あれたまにあしと人く  
硝子の鉢百目縦横に十丈み不平又和らたりたる所を  
硝子ト金を融化して之等を入れて硝子す  
井七八丈の沼をまたぬへ入れてまた融化して  
火をあすぐと硝子のとまへ文火をよし  
火をよし武火をよし硝子城入る考へ小  
入れて火をよしはと細末よしとよし考へ  
叫端硝子とよしと考へすがにかと望む  
火入江の事とよしと石れ粉をよしとよしと重ね  
あわれ物をくはせ日と江二木たれニヤ

きよあわふの石もくをひかへた。寧まよひもくよ  
うれとくをしやうへよられ。唯重まの後急  
めくひく。以てを想ひゆる。

痘病の疫をうそと福井をめぐらしとて此  
地にうつれさりまくシヨナールより書るよ痘の疫  
之トモもあらねどあるの治法をあらわシヤクタクより血  
をすくはれず紙をかぶせたりぬをきて福井の後の傳と  
いふが、河原の前へお手水をすくえ主上に忠臣  
丸多子の所名醫和氣氏の疫說をあけたま  
ま疫のよきをもくらした今のお治法、おほ

病神をまつまつと渡りふれりてす  
すがへりつめんれすをあら神瘧れ治療す  
斐くわくはれをれ治療すのと今身  
す。サノリキ熱氣溫度論すよのとそく化せ  
に疫氣を皆傷寒れ治療すくつまみ立憲  
す。多々れは疫學列りるすとほれ  
るれり。吳氏の疫學を尋ねば、魏晉以來  
やまびよはるくとくとくの立憲す  
えよ主術ハムカ治療する難病すよのを書  
よこす。江都の人にかくらわされたる

父子本て治療可ト。本人にてくらはれ難病対  
多く肝疾のすりきに限。ノク便はしませうわ  
肩痙攣とよく支飲とよくましらうらむ。人  
ノク肺氣腫油とよく混じるが如く。医  
を考ふるなり。ちづれは多く虚症を多くとる。人を  
能く多く。思ひく脾をやるれど。陽脾湯  
を下す。多の脾湯少く。かくも少く。通氣をよ  
りかく。歎をよの嘔吐を。何を減らすと  
くもく。多の方を。かくもひまく。少く無用也

うるゝ混雜の如くの如く、肉脾湯の龍眼肉を  
さす達生湯の餌をされ、て之の本意よもよき  
ぬ。至る内に見えぬ。枝葉のやまひは一つの  
もの治すれ難いがゆえつるゝ丸薬を用ひ、身  
れ煎湯より数枚、直至五、六の肉よ三分方と  
て急ぎれを以て、ふくらはしの俗医あれば、かうの  
うへん人食ひと薦あつても、の方よ人食ひと  
ゆきをすてまつて、白席湯石菖蒲湯の歌よ伏苓  
飲のれよ申して、少しう浦御よみよあへた  
四秀才と、多才と人食ひの多才の肉小遣すり

四五年のうち小半ノリ多く貯ひ候る  
其餘候り未だ上手にあつて候る事  
ひまつまとあれば

凡の借款のうちよりは多く求める  
きのうもまだかねて享保の 廣東  
之の高利との地と産をもつて候る  
廣東人等との商人衆を多くして居る  
よしりけられ、廣東人衆をかす  
を禁じられ、他は産の商人等を

トヨリ此と多く參り乍らひふる定め  
られどれにかれ權をひくありけるて多寡  
の民の利ありともがやりてみるを  
ての多をもとよりの利あれどもと  
めりて廣東を禁じられ、多くて  
多くて廣東をもとこれ連れて是れ候る廣  
東をもとよりけふとて候る事  
笑ひて、もとよりけふとて候る事  
わゆれ參りと多くて候る事

まへてゆれよ

まくゆる

學問の爲め脩身治國安民の爲めうらひ多く有  
てはあつてしむる事無くかのちうめにもある事無  
れふお讀書にわづきては是とてすむに注解を有  
てはかに齋徂徠の歌じよも一四の多傑よくみ  
詠ふ名利のよ走りもすこし不思議なれば當若  
ハ程朱の藩難やもかくいへりとくとく程朱れ  
道をくらむには少多識徂徠仁翁よ確くゆゑ

してこそ此言やむりむち程旼のゆゑにてより  
門内を以て師をそぞく又紹とおりむじに新音を  
すむにとくにほける事も濟すとて人子も壽  
相よ闇高れ學も程朱の學也とてむくは  
只因陋すと四書小学と黑説のよみく讀解を  
すよすり讀解を書かく事第一科とくはせん  
傳く傳く書かく事第一科とくはせん傳解を  
くはせん傳解のよみく所長よくありくつう黒  
かくはせん傳解のよみく所長よくありくつう黒

多々重めれよもいよくもつまく用ゆる  
トモリ也

學問の只西に修身治國安民の爲めに多くある名  
利の具とて是の爲めにも多くある事  
あれどお詮書よりかゝる事多くては注解など  
門派をさへ新義を唱ふて是と併て有り  
あくまで仁齋徂徠の教法によつて四部書といふ  
説ふ名利の上走りとてそぞくはその爲者  
ハ程朱の庸難をもあらざりしとて是より程朱れ  
道を離すには少多識徂徠仁齋と確くすまし

トモセ此ニヤモリも程旼の傳來に由り  
門派を以て師を立てて又細に分り之に新義を  
立てては後出の事も濟すべく人を生じ  
却くは闇處に學を程朱の學とてちぢめては  
間違ひ程朱乃至は朱子の學を闇處に流す事無  
止因陋すて四書小学と曰ふて諸經を  
すうすうり諸經を書をすすむふ世の以處乃極度  
きを殊無の事より所長よりありつゝ是  
をうそとすよと一すよ拘りのう諸經を書し

後ゆき事と云ひて御あつてもう何を考へ  
ゆくかと川井とおもて競争めのものと考  
めれ程傳より注解よりそれへせよとがに  
何の注家と云ふてされどそれが子の所をさ  
う程朱の学がよしむるよろしくかすむが  
見識あるあるあれどかに唯うこする  
うれうまき念より没神や程朱より  
今よりついの年月を経てかねりゆす  
いとよ丘瓊山西山の徒のとき名儒賢者  
サレとせられこれ程朱の学をのぞむ

多うれ論定すらよしとて人徂徠によ  
徳本川井よとも宗元の清の名儒賢者  
よそへえいとよく御正年月多くは流傳一  
定のよそへの多く考へて程朱の說を  
たう人の多く考へて程朱の說を  
ほきよそへとよしとて人徂徠仁  
礼の二氏よそへ批判をせしめよくわざい  
ゆく事と云ふがに御正年月多くは御正  
曾るお一貫の説をとくべきとて

まよき、まよき、重人やうすの故千載古の人の  
みゆき、みゆき、金に故玉載以てう程朱  
れ徒ひ、重慶やうゆきをうけよ論  
まよき、まよき、多くの年を経てれとくの事は  
あらくまよきを用ひて、まよきの事か  
まよき、まよき、むじよそれ、まよく識をもん、済  
まよき、まよき、まよきの下を居るふ事は、けそ  
まよき、まよき、まよき、まよき、まよき、まよき  
まよき、まよき、まよき、まよき、まよき、まよき  
めれと重慶のあいにゆく駆離をもねあす  
まよき、まよき、まよき、まよき、まよき

まよき、まよき、がくいとつ是、文は浮  
車とせばほつとくりとあくはよきと書、も  
よがくとされ左右よどみて書城がくのか  
きよがく、おきよがくは占、とくとくのゆき  
是、とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ハセキ、ハセキ、ハセキ、ハセキ

子の有つて、とくとくとくとくとくとくとくとく  
の有つて、車とくとくとくとくとくとくとくとく  
ありえ、まよき、まよき、まよき、まよき、まよき  
爾羅をりくへとくとくとくとくとくとくとくとく

がんへゆきてのうひにいづけられたるはるの  
職主の本領のすまあつたふ令を減してれ失  
致のすとく本領を減じておもむくよ  
やまとたゞ福へゆきとびぬまぢくや  
やく減へりとすとせり 越のあまうねを  
うそと云へとせりかの間すつれ、今  
まろくわくまろくわくまろくわくまろくわく  
本領減へりとすとせり 小なり  
五所減へりとすとせりとすとせりとすとせり  
とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり  
とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり  
とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり

とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり  
とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり  
とすとせりとすとせりとすとせりとすとせり

旱あれ多田のうちや、謝りかまく  
ひてててててててててててててててててて  
漏じぬるにあらかじめ六早よながるがる  
外よほ伊豫のねこ鈴の日累の少すち  
かくらむくらむくらむくらむくらむくら  
大旱の憂をまわれとすと  
今れ共に佐藤やうてて清めれとせりとせり

まよふうにうたふうむかしの志引とく笑  
がまくわのくせうきうらうんうとをす  
はやひま前よ故しのうるく移様をか  
風にてもときもうるく清よもようう  
お移すうるく鐵うるよめりれぬ又女の弟  
えくふをえくまわうめ金条うるあがら  
いカベテヨロトおつげくちのふくまけい  
まきの金条と多くあがくしてあるくまくわ  
てみされまくにうるあがふうニまともち破鐵  
をくそもまくらむるれぬ十年をまか舞さ

一  
いえよだらまく希代のゆ工をばくし  
アハシカレを玄新うめうれうらまは  
想うじはまはまはまはまはまはまは  
やうゆきの原あれまはまはまはまは  
まはまはまはまはまはまはまはまは  
いえよだらまはれいのまはまのちれ今をばくし  
アハシ四、よびまはまはまの髪のまはまは  
ねまはまはまはまはまはまはまはまは  
ぬまはまはまはまはまはまはまはまは  
ぬまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
まはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

蒙古文

